

**頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書**

**タイ民主化における司法の役割
—司法、軍、王室—**

派遣者：外山 文子

派遣期間：2014年8月5日～8月21日、8月24日～9月22日

派遣先：チュラロンコーン大学政治学部（タイ国）

キーワード：タイ民主化、司法の政治化、政治の司法化、軍、王室

1. 研究課題について（400字程度）

現在タイでは、司法による政治的判決を巡って、国を二分する激しい対立が生まれている。司法の判決が、なぜ一部国民から激しく批判され、その政治的偏向性を糾弾されるのか。タイ司法が「政治化」した原因は、何であるのだろうか。司法の「中立性」や「独立性」に対しては、既に疑問を呈する見解が登場している。

本研究では、憲法裁判所のみならず、政治職者の刑事裁判を担当する最高裁判所、各種独立機関（選挙委員会、国家汚職防止取締委員会等）、その他の取締機関をも含めたタイ司法全体について制度などの特徴を描き出し、「司法ネットワーク」が政治化した原因を明らかにすることにより、司法の民主化に対する影響を検証することを目的とするものである。

2. 派遣の内容（400字程度）

8月および9月は、タイ国のチュラロンコーン大学政治学部のシリパン准教授のもとで研究させて頂くこととなった。シリパン先生のタイの選挙制度に関する講義およびポンサン先生の憲法の講義を受講しながら、附属図書館での資料収集を行った。憲法裁判所の図書館でも調査を行った。また古本屋がチュラ大に販売に来ていたので、そこで思いもかけず興味深い本を購入することができた。

加えて、タイでは非常に多くセミナーが開催されているため、これらのセミナーに積極的に参加した。9月7日には、京都大学東南アジア研究所バンコク事務所にて開催された「第4回バンコク東南アジア研究会」において、タイのクーデタと司法との関係について発表を行った。チュラロンコーン大学への派遣期間は2か月弱であったが、コーネル大学時代以上に多忙で密度の濃い日々となった。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800字程度）

5月のクーデタ以降、初のタイ渡航であり、暫定政権による情報統制について色々と聞いていたため、研究状況について心配していたが、想像よりもアクティブに多くのセミナーが開催されていたことをうれしく感じた。外国人研究者である私に対して、タイ人の学生、研究者や知識人らは、現在でも積極的に政治の話をしてくれたことに感謝している。地域研究の伝統校であるコーネル大学での研究は有意義なものであったが、やはり「現場」である、タイでのフィールドワークは、非常にエキサイティングであった。

大学での講義やセミナーも非常に勉強になったが、最も良かったことは、自分の研究テーマに関して、

チュラロンコーン大学の先生方と意見交換ができたことであった。今回のテーマである「タイ司法と民主化」についてのみならず、そこから派生した新たな関心テーマも含めて、タイ人のトップクラスの政治研究者がどのような認識であるかを把握できたことは、今後自分が開拓すべき研究の方向性を見極める上で非常に参考になった。

研究の詳細部分については記載を省かせて頂きたいが、タイ司法に関する研究の歴史的側面としては、コーネルで資料を収集してきた 1940 年代、1970 年代に加えて、1950 年代についても調査する必要性が明らかとなった。また、現在のタイ司法の異常性については、むしろ 1990 年代後半以降の政治状況の変化の方が重要であることが確実となってきたため、改めて過去 20 年の司法改革について深く調査すべきであることを確認した。

また、私が重点をおいている人脈作りについても、研究者、院生、官僚、その他知識人を含め、短期間で非常に広がった。タイ人の人懐っこい性格もあってか、米国時代よりも人脈が広がりやすいことを実感した。



タイレル・ハバーコン氏のセミナー
(2014年8月17日@チェンマイ大学)



チュラロンคอน大学政治学部セミナー
 (2014年8月18日@チュラロンコン大学)



コーネル大学東南アジアプログラム院生によるセミナー
 (2014年8月@チュラロンコン大学文学部)



第4回バンコク東南アジア研究会
(2014年9月7日@京都大学東南アジア研究所バンコク事務)



元首相チュアン・リークパイ氏のセミナー
(2014年9月11日@チュラロンコーン大学)

4. 目的の達成度や反省点 (400字程度)

チュラロンコーン大学では、1970年代および1990年代以降の司法や政治改革に関する資料を収集した。コーネル大学ではスキャンが無料であったため、殆どの文献をスキャンしたが、チュラ大ではそのようなサービスは行われていなかったため、図書館のフロアに入っているコピーサービスを利用して大量の文献をコピーした。(日本への宅急便代が高くついて痛かった)

しかし、タイで調査すべきこと、収集すべき資料はまだ大量に残っており、今回の派遣期間では十分にこなせたとは言えない。だが、今後研究を進める上で、貴重な導入口となったことは間違いない。タイ司法と民主化、しかも司法の歴史的側面までカバーするという非常に大きなテーマであるため、一筋縄ではいかない。しかし、このテーマは、今後タイ政治を分析する上で必要不可欠な内容であり、更なる広がりを持つテーマであることは間違いない。今回の派遣で得た研究成果をステップに、一層研究に邁進していきたいと考えている。

5. 今後の派遣における課題と目標 (400字程度)

頭脳循環プログラムでのタイ渡航は、2015年2月～3月のチュラ大での発表を最後に終了するが、今年4月からは、タイのタムマサート大学政治学部に2年間の長期留学に入る予定である。今回頂いた研究助成の成果を、最終的には著書として出版できるように、引き続き研究を進めていく所存である。